

酒井正子＝著

羽田 日本を担う拠点空港

航空交通と都道府県

花岡伸也
HANAOKA, Shinya

アジア工科大学院土木工学研究科助教授

羽田 日本を担う拠点空港

航空交通と都道府県

酒井 正子 著

2005年7月発行
2,600円株式会社 成山堂書店
ISBN4-425-86141-8

本誌の書評を振り返るまでもなく、交通・運輸に関する書籍は数多く出版されている。しかし航空分野に関する書籍は、他の交通機関と比較して、専門書、特に和書は決して多くないと思われる。本書は航空を対象とした貴重な専門書であり、丁寧なデータの解説と現象の解明に特徴がある。航空輸送研究に長年取り組んできた著者の労力の結晶である。

本書は、「旅客利便性向上を念頭においた多頻度運航と航空機のダウンサイジング」を主題として、5章で構成されている。

第1章『わが国の航空輸送市場と世界の航空の動向』では、「航空機のサイズ」をキーワードとして、日本の国内線で運航されている航空機材構成の特殊性が論じられている。航空機のサイズと他の要因（路線種類、輸送量、運航頻度、座席利用率）の関係をクロス集計等で示した興味深い結果が数多く提供される。国際比較においては、欧米では多頻度化、航空機のダウンサイジングが進展し、旅客利便性が向上していることが示される。対照的に、日本の国内線、特に羽田空港を離発着する幹線はB747などの大型機が中心である。著者がI章の最後で指摘しているとおり、日本の航空会社は、羽田の発着枠に制限があるため、投入機の大型化によって供給座席数を増やした。発着枠に余裕があれば、航空機の大型化だけではなく多頻度化によっても需要に対応できるが、羽田ではそれが不可能だったのである。羽田は国内航空旅客の60%が利用する空港であることから、日本の航空会社の保有機材に大型機が多いのは必然であった。

第1章で示されたこのような構造的問題に関連し、第2章『規制緩和と空港整備』では、日本の航空規制緩和と政策と空港整備の経緯がわかりやすくまとめられている。

第3章『羽田路線と地方間路線の供給・需要分析』と第4章『都市間の社会的距離の変化と航空の役割』では、著者の研究成果が示されている。Ⅲ章では、発着枠制約によって埋もれている羽田空港の潜在需要を、他者が開発した既発表の2つの需要予測モデルを用いて、著者自身が推定している。

そして、1996年度時点における需要予測モデルの推定値と実績値の比較を行っている。第3者による需要予測の再計算は、航空分野に限らず、実施された事例を拝見した経験はほとんどない。著者の再計算の意図は、「潜在需要があったか否かという事実の確認と、あったとすればどの路線であるのか、そして羽田の利用旅客のどの程度の割合を占めていたのかを明らかにする点」にあるが、評者は再計算の試み自体も評価したい。Ⅲ章後半では、地方都市間路線の需要についても需要予測モデルを用いて再計算し、モデルの検証を行っている。

Ⅳ章では交通地理学的なアプローチを用いて、著者の定義する「社会的距離」の変動を捉えている。副題に都道府県とあるのはⅣ章を意識してのことであろう。最後に第4章『21世紀日本における羽田路線と地方間路線』で、著者の主張「多頻度化とダウンサイジング」の意義が改めて展開されている。

以上のように本書は有益な情報が満載であるが、評者にはもう1つ加えて欲しい内容がある。それは航空会社の機材運航戦略である。2009年に予定されている羽田空港の拡張に向けて、国内の大小の航空会社は多頻度化とダウンサイジングを検討しているかもしれない。航空機材の購入・編成には長期的なビジョンが不可欠であり、それが本書に含まれていれば著者の主張の実現可能性がより深く論じられたのではないかと思う。発着枠に余裕ができれば、路線需要に適合した機材を投入し、頻度でも供給座席数を調整できるようになる。このような環境が与えられたとき、日本の航空会社が欧米のように多頻度化・ダウンサイジングに移行するつもりがあるかどうか、とても興味があるところである。

著者はあとがきで、航空輸送研究は「なかなか奥が深い分野である」と述べている。評者もこれに深く同意する。本書を読んで航空に興味を持ち、それに携わる研究者が増えることを期待している。